

【コラム】

1996年・2000年オリンピック出場の内顧

新井祐子*1

I. 東京オリンピックフェンシング競技で初の金メダル

昨年、新型コロナウイルスの影響で延期になった2020東京オリンピックが、今年2021年7月23日（金）～8月8日（日）に開催された。今年行われた2020東京大会では、日本フェンシング界念願の初金メダルを男子エペ団体が獲得した。過去に2008年北京大会で日本フェンシング界初のメダル（男子フルーレ個人銀メダル）を獲得し、2012年ロンドン大会では男子フルーレ団体銀メダルを獲得している。

その快挙を成し遂げた要素の1つとして、選手をサポートする環境的側面が、私の出場した時（1996年アトランタ大会（図1）、2000年シドニー大会（図2））よりも大きく改善された点が挙げられる。本稿では、先の環境的側面が私の時代と比較して、どう変わったのかを述べてゆく。

また余談になるが、2020東京大会には本学から卒業生1名、現役部員1名が出場しており、卒業生は女子サーブル個人・団体に出場し5位入賞、現役部員は女子フルーレ団体に出場し6位入賞し、過去にも2012ロンドン大会に卒業生1名が女子サーブル個人に出場し16位になっており、体育会フェンシング部から3名のオリンピックを輩出している。



図1 1996アトランタ大会開会式

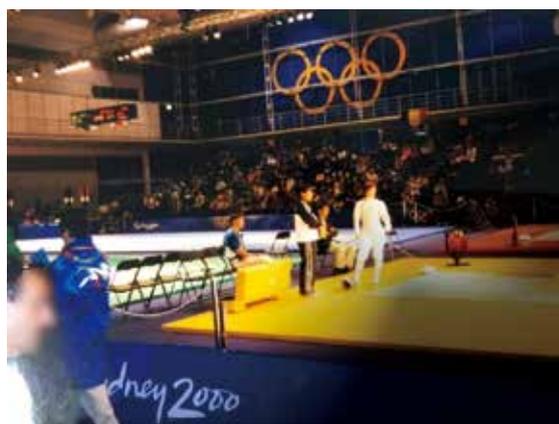


図2 2000シドニー大会試合

II. 自身が出場したオリンピックと現在のオリンピックの環境的な違い

1. フェンシング競技の日本人出場選手数と出場種目数の推移

表1に、フルーレ、サーブル、エペの3種目別からみた日本人出場選手数の推移を示す。図3に1996年から2020年度までのフェンシング競技の日本人選手数と種目数の推移を示す。2000年シドニー大会後から日本人出場選手と出場種目が増えているのが分かる。図4に1996年から2020年度にフェンシング競技で獲得したメダル数と入賞数を示す。2008年北京大会から入賞（メダルを含む）が増えているのが分かる。

私の出場した1996年アトランタ大会や2000年シドニー大会では、全ての競技の日本の総メダル獲得数が歴代オリンピックの中でも少ないと言われている。日本フェンシング協会も含めて日本スポーツ界全体でシドニー大会以降に再度強化が始まったといえる。フェンシング競技においても、2004年アテネ大会から出場選手数や種目数が少しずつ増加していることが窺える（表1・図3）。

受付日 2021.12.27

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

表1 1996年アトランタ大会から2020年東京大会までのフェンシング競技の出場選手数

| 年 | 開催地 | 出場者 総数 | 男子 | | | 女子 | | |
|------|----------|-----------|------|------|----|------|------|----|
| | | | フルーレ | サーブル | エペ | フルーレ | サーブル | エペ |
| 1996 | アトランタ | 4 | 1 | | | | | 3 |
| 2000 | シドニー | 4 | 1 | 1 | | 2 | | |
| 2004 | アテネ | 5 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 1 |
| 2008 | 北京 | 7 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2012 | ロンドン | 10 | 4 | | | 4 | 1 | 1 |
| 2016 | リオデジャネイロ | 6 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2020 | 東京 | 21 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 1 |

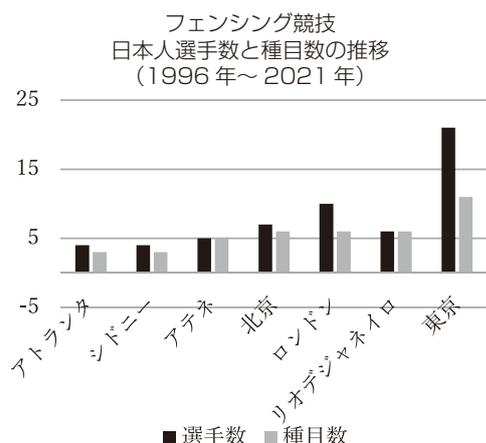


図3 フェンシング競技の日本人選手数と種目数の推移

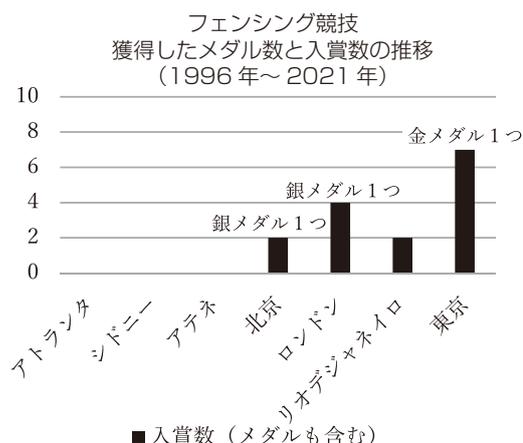


図4 フェンシング競技で獲得したメダル数と入賞数の推移

強化の成果は、図4のグラフに示した通り、メダル数が2008年北京大会で銀メダル1つ、2012年ロンドン大会で銀メダル1つ、2020東京大会で金メダル1つ獲得、入賞数も2008年北京大会2種目（銀メダル含む）、2012年ロンドン大会4種目（銀メダル含む）、2016年リオデジャネイロ大会2種目、2020年東京大会7種目（金メダル含む）という結果を出している。

2. 費用面

現在は日本フェンシング協会に多くのスポンサー企業がつき、競技力の高さやランキングの順位などで、多少の金銭的な違いはあるが日本代表選手の金銭的負担は軽減されてきていると考えられる。

フェンシング競技は日本代表選手であっても、海外遠征や国内合宿に自己負担金が発生することが多く、特に昔はスポンサーがついていない選手も多かったため、選手個人が費用を負担するような厳しい環境だった。

私自身は比較的恵まれた環境で、大学4年で頭角をあらわしてからは、数年後に行われる大阪の国体選手として呼ばれ大阪の企業に所属しながら、日本代表選手として活動し海外遠征や国内合宿などの費用はすべて負担してもらっていた。しかし、そうしたケースはごく1部の人に限定されていた。

3. 就職サポート

就職の支援についても現在と昔では違う。昔もフェンシングを続ける環境として、フェンシング部を有する企業等や私のように国体選手としての就職もあったが、大半は自分で就職先を探し、競技環境が乏しい中で選手を続けることが一般的だった。

現在は、トップアスリートの支援としてJOCの就職支援制度「アスナビ」があり、企業と現役トップアスリートをマッチングするというサポートがあり、就職の支援はよくなっている。

4. 外国人コーチ招聘

現在、日本フェンシング協会は、世界トップレベルの外国人コーチを複数人招聘している。2008年北京や2012年ロンドンでの銀メダル獲得、2020東京オリンピックでの金メダル獲得は、外国人コーチの手腕が強く反映された結果だと推察される。

昔は、日本代表チームのコーチはすべて日本人コーチであり、それもコーチ陣もボランティアのような形だった。私は選手の立場から『教えてもらってありがたいし、申し訳ない』と感じながら指導を受けていた。このことから指導面でのサポート環境もよくなったと言える。

5. 施設

東京にはトップアスリートを対象とした拠点がある。2001年にできた国立スポーツ科学センター（JISS）はスポーツ医・科学、情報に関する研究活動等の拠点として、2008年にできたナショナルトレーニングセンター（NTC）はトップアスリートが集中的・継続的に強化活動を行うことができるトレーニング拠点として作られた施設である。この施設は私の2回目のオリンピック出場後にできており、もっとはやくできていればとよく思っていた。

6. 試合経験や合宿・練習

前述されたように、トップアスリートが集中的・継続的に強化活動を行うことができるトレーニングを目的としたナショナルトレーニングセンター（NTC）ができたので、現在はフェンシング競技の日本代表選手が常時練習できる環境がある。それに加えて、ワールドカップの出場数も増え、また海外や国内での合宿も増えている。

昔は、世界選手権など大会前に数回、国内合宿があるだけであったので、現在は昔に比べて、練習の質も量もあり、また多くの試合経験を積むことで、日常的に日本代表チームとしての意識も高まっていると言える。

Ⅲ. 未来のオリンピックに伝えたいこと

今年行われた2020東京では、日本フェンシング界念願の初金メダルを男子エペ団体が獲得し、これからオリンピックを目指す選手たちに夢や希望を与えてくれた。

昔の私にはオリンピックでのメダル獲得はあまり現実味のないものだったが、これからの選手たちには、グッと身近なものになったに違いありません。充実した環境面からの後押しもあり、『自分たちにもできる!!』と男子エペの選手たちに続いてほしいと思う。

また2020東京フェンシング競技では、金メダルを獲得した男子エペだけでなく、他の種目でも6つ入賞しており、すべての種目のレベルが上がっていてどの種目においても3年後2024パリ大会での健闘が期待できる。

Ⅳ. 今後、期待される取り組み

アスリートにとっては、新型コロナウイルス感染症の影響で大変な競技生活だったと思うが、それを糧にしながら今後においても、競技の強化や目に見える成果を持続させることが重要だと考える。同時に、広報を主とした普及面においても力をいれ、競技人口を増やすべきときだと考えている。特に子供たちを対象とした「オリンピックとスポーツ（フェンシングに特化した）」の教育を行い、オリンピックの精神、バリュー、ムーブメントの意義などを伝え、未来のオリンピックを体系的に育成してゆくことが大切であると考えている。